

氏名	田 坂 正 堂
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	甲 第 8 1 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和37年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科外科系耳鼻咽喉科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	鼓室成形術に関する細菌学的研究
論 文 審 査 委 員	教授 高原 滋 夫 教授 村 上 栄 教授 水 原 舜 爾

学 位 論 文 内 容 要 旨

第1編 検出菌の種類とその術前、術中、術後の消長について

第2編 検出菌の薬剤感受性について

近年鼓室成形術が発達してきたので、改めて細菌学的な角度からも研究することは有意義であると考え、次の研究を行った。

第1編においては、鼓室成形術を行った慢性中耳炎症例55例61耳について 検出菌の種類と術前、術中、術後における検出菌の消長とを一貫して研究した結果、①術前検出菌98株中最も多く検出されたのは Staphyl. aureus 16株次いで Pseudom. aerug. 12株, Diphtheroid 12株, Dipl. pneum. 8 株, Pneum. mucosus 7 株, Microc. 属 7 株……の順であり、②術前検出菌では混合感染は単一感染の 2 倍多く、個々の菌では Staphyl. aureus は単一感染が 2 倍多かったがその他の殆どの菌は混合感染が多く、③単一感染は術中、術後と順に減少するが、混合感染は術中著減するにも拘らず術後は再び増加し、④Staphyl. aureus 等は術中、術後皆無となるが、Pseud. aerug. 等は術中、術後も容易に消失しない頑固な菌で余程慎重に術を施行する必要があると結論した。

第2編においては、第1編において検出された菌の薬剤感受性を研究し、①術前検出菌の disc test では Sulfisoxazol に最も耐性高く、次いで Aureomycin, Terramycin, Penicillin の順で、Streptomycin,

Chloramphenicol には最も耐性が低く、個々の菌についても多少の差こそあれ同様の結果を得、②前半期に比べて後半期は耐性が全般に増加し、しかも耐性の順位は変動した。又③感受性検査は個々の菌については是非行われるべきであり、術に際しては病巣を完全に除去し菌を皆無にすべく努力しなければ、化学療法に破綻を来す憂いありと強調した。

日本耳鼻咽喉科学会会報 第65巻、第7号に掲載予定

論文審査の結果の要旨

田坂正堂提出の「鼓室成形術に関する細菌学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

古来、中耳炎に関する細菌学的研究は数多いが、近年発達して来た鼓室成形術についての報告は少く、しかも手術前、手術中及び手術後を通じて一貫して検出菌の消長変遷を研究した報告は従来全く見当らない。第1編においては、検出菌の種類を決定し、手術中更に手術後の経過を左右する菌について詳細に述べ、第2編においては、その検出菌の薬剤感受性を「感受性ディスク」を用いて研究した結果、菌の薬剤耐性は次第に増加変動しているので、臨床応用に際しては細菌学的合理性に立脚した処置を施さなければ、やがて化学療法も破綻を来す憂いがあると強調した。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せらるべき学力を有すると認める。